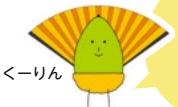


京都三山の森は、時代とともに その姿を変えてきました



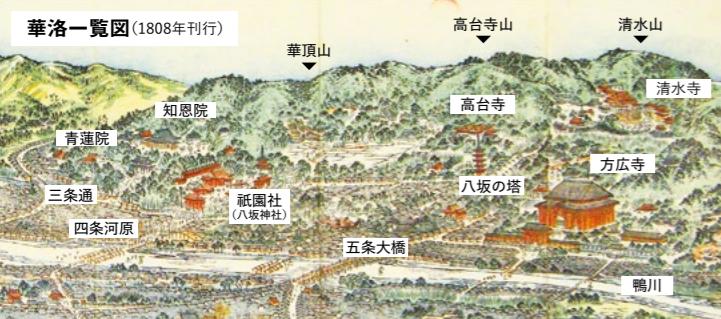
「京都らしさ」ってなんだろう?
森の変化をたどりながら、
未来の森づくりのヒントを探してみよう!

9世紀以降の植生の変化 森が育んだ都の暮らしと木の文化

平安京の造営に必要な木材は右京区京北から保津川の筏流しで供給され、日々の暮らしに必要な薪炭は京都三山や周辺地域から供給されつけました。地力が痩せていくに伴いマツ林が主となり、日本文化を象徴する山になりました。

~8世紀頃 弥生時代～平安京造りまで	アカマツやナラ類が増えはじめる
9世紀～ 平安時代	商業的な薪炭利用によりアカマツやナラ類を中心とする二次林が形成
13世紀～ 鎌倉／室町時代	少しずつアカマツの分布が増える
17世紀～ 江戸時代	アカマツが優占する森と柴山(低木林)が点在

かつては燃料用の薪や焚き付け用の柴として、アカマツやコバノミツバツツジを利用していたんだよ。鎌倉時代から昭和初期までは、大原女(おおはらめ)と呼ばれる行商が、薪や柴を頭に載せて京の町で売り歩く風習があったんだ。五山の送り火や、鞍馬火祭りの松明には、いまもアカマツが使われているよ。でも、森が荒廃して調達は難しくなってきていたよ。



江戸末期に描かれた『華洛一覧図』では、華頂山の山頂あたりにマツが見られるが、高台寺山にはほとんど高木がみられない。三条通から北側の山には低木林や草地が広がる(京都市歴史資料館所蔵)。



100年前の転機

人の手が離れたとたんに荒れはじめた森

明治維新後に国有林化され「禁伐」の地となった東山は放置され、手入れが行き届かなくなりました。さらに、燃料革命や外材輸入、好景気による生活スタイルの変化などを背景に、人と森とはますます疎遠になりました。

1900年頃 明治／大正時代	アカマツを中心とする森林と薪炭林・スキ草原「上知令」による社寺有林の国有化と伐採の制限
1930年頃 昭和初期	室戸台風(1934)で大きな被害を受ける 戦後復興で木材需要が高まる
1960年頃 昭和30年代	燃料革命、木材輸入の自由化 アカマツとナラ類の広葉樹林
1970年頃 昭和40年代	高度経済成長のピーク 風致地区指定、古都保存法の制定

私たちがめざすのは 「京都らしく健全な森」

樹木の寿命は人間よりも長いものが多く、100年以上生きつづける種も少なくありません。京都伝統文化の森推進協議会は、未来の京都に残したい森の姿を思い描き、森と人との「新しい関係」を結びなおしながら、森づくりをすすめています。



自然の理にかなう 「適地適木」を見極める

森の環境は一様ではありません。尾根と谷筋とでは陽あたりや風通し、土質も異なります。樹木の好む環境や育つスピードも違います。植物は自分で移動できませんから、植える人間の責任は重大です。まわりの木との調和も考えながら植えています。



地域で生まれ育った 苗木を植える

同じ樹種でも地域が異なると遺伝的な違いがあります。私たちは、地域内の木々の種から育てた苗木を植えています。



眺めて美しく、 多様な命が息づく森に

季節の変化を告げる花木、夏に木陰をつくる樹木、秋を彩る落葉樹、雪に映える針葉樹、生き物たちの好む花実をつける樹木など、多様な樹種を組み合わせ、疎密をつけて植えています。多様な樹種が育つ森は昆虫や鳥、小動物など様々な命が息づきます。



モニタリング調査や生育を 促す保育作業の実施

植栽した苗木の生育を妨げる樹木を伐採する除伐や、生育状況をモニタリングし、植栽の効果検証などをしています。



この50年のめぐらしい変化 変わりはてた三山の姿に、保全活動の機運が高まる

人の手が離れた森で植生遷移が進み、枯れたマツに変わってシイが勢力を拡大しました。初夏の東山に現れるシイの開花によるマダラ模様は年々広がり、景観の変貌が進みました。見慣れていたはずの三山の異様な姿を前にして、私たちはようやくその危機に気づいたのです。



京都の伝統と文化を育んできた 三山の危機を、見すごせない!

私たちは未来に残す森の姿を思い描いて、森づくりを始めました



東山を歩いて 想像しよう

命きらめく100年後の森



「京都伝統文化の森推進協議会」の森づくりは、みなさんのご協力に支えられています

サポーター

青蓮院門跡、清水寺、高台寺、祇園商店街振興組合、真宗大谷派宗務所

活動協力団体

粟田自治連合会、弥栄自治連合会、清水自治連合会、修道自治連合会、清水寺門前会、東山保勝会、ハイアッソージェンシー京都、ウェスティン都ホテル京都、京都室町ライオンズクラブ、ドットカム京都24 竜友会青年部、公益財団法人手織技術振興財団、積水化学工業株式会社、フィールドソサイエティー、嵐山保勝会、京都森林インストラクター会、星のや京都、植彌加藤造園株式会社、武田薬品工業株式会社京都薬用植物園

special thanks シックスセンシズ 京都



設立の趣旨、活動の詳細はこち

<https://kyoto-dentoubunkanomori.jp/>



インスタグラムものぞいてね!

https://www.instagram.com/kyoto_den_bun/



ご寄付・活動支援のお申し込み

<https://kyoto-dentoubunkanomori.jp/support/>



このパンフレットの用紙は「エコ間伐材N」を使用しています(K0301090)。
植林された森林の健全な成長を促すために間伐された「間伐材クリップパレル」を10%以上、古紙パラプを30%以上配合しています。



東山の森を歩きませんか!

HIGASHIYAMA WALKING MAP

神社仏閣や文化施設が点在する東山の裾野は、京都屈指の人気観光エリア。裾野から見上げる稜線は、まるで一幅の屏風絵のよう。森に一歩入れば、息づく命の気配につつまれます。つづら坂を進んでたどり着くのは、山頂の展望台。京都盆地を眺めながら、絶えることなくつづく森と人の物語に思いをはせてみませんか。



「京都伝統文化の森推進協議会」の活動エリア

高台寺山国有林

おすすめ散策ルート



木もれ陽たっぷり縦断コース

約3.5km
約100分

京都の歴史を満喫コース

安全・快適に散策を楽しむために…

- 森は生きています。動植物を傷つけないで!
- 火災の原因となる喫煙・焚火・花火は厳禁です!
- ゴミはすべて持ち帰りましょう。
- 山歩きに適した服装と、天候の急変に備えた装備を

注意

林内には国有林歩道や京都一周トレイルが整備されていますが、なかには通行止めになっている危険な場所もあります。沿道の案内板や注意書きをよく読んで、各自の責任で散策してください。

ここに注目! ヒノキ林を楽しむつづら折の散策路

粟田口から登りはじめるとすぐにヒノキの林が出迎えます。古くからヒノキは良質な建材として社寺や住居建築に多用され、樹皮を剥いた檜皮(ひわだ)は屋根材として珍重されました。ヒノキの放つ香り成分のフィトンチッドにはリラックス効果があります。坂の途中、ふと振り返ると、木立の間から平安神宮の大鳥居が見守っています。

ここに注目! キクタニギクの自生の再生

この和名は高台寺山の菊溪に自生していたことにちなんでいます。明るくて乾いた谷間を好むのですが、人手が入らなくなり、シイが増えて光が届かなくなっこで姿を消しました。協議会では「キクタニギクの自生地」を蘇らせようと、2017年からシイを伐採して日当たりを確保し、市民の協力を得て、自生地の再生をめざして活動しています。

ここに注目! 光の届かない暗い森から、陽光あふれる明るい森に

陽ざしを好む木もあれば暗い場所で生きられる木もあり、葉の形や根の張り方は異なります。多様な動植物がいきいき育つ森づくりは、多様な生息環境をつくることから始まります。増えすぎたシイを伐採して光が差し込む場所を増やす、ツツジ・ムラサキシキブ・イロハモミジ・サクラ・エゴノキ・ヒノキなど多様な樹種を植えています。

地図の凡例

- 京都一周トレイル (トレイル番号)
- ↔ 所要時間
- ゲート (境内地との境界)
- 「京都伝統文化の森推進協議会」設置看板
- 森づくりのエリア
- 見どころスポット
- WC トイレ

東山の森を彩る植物たち



コバノミツバツツジ ツツジ科の落葉低木。明るい尾根筋に多く、ピンク色の花を咲かせる早春の代表種。材はゆっくり燃えるので、松明や火付け用の柴として利用された。★4月



ウワミズザクラ バラ科の落葉高木。花期にはバラのような白い花が多数密集して咲き、甘く香る。実は夏に赤くなる。材は、古代の亀甲占いに使用された。★4~5月、●9~10月



ギンリョウソウ ツツジ科の多年草。葉緑体をもたず、透けた白色が特徴。寄生した菌類を経由して、菌類と共生する樹木の栄養分を得ている。別名「ユウレイタケ」。★4~5月、●11月



コバノガマズミ ガマズミ科の落葉低木。白い小さな花を密集して咲かせる。秋に熟す赤い実も美しく、野鳥たちが好んでついぱむ。★4~5月、●11月



カクミノスノキ ツツジ科の落葉低木。早春に鐘状の小さな花を咲かせる。夏に赤く熟す実は角ばかり、ウスノキともよばれる。★4~6月、●7~8月



ムラサキシキブ シソ科の落葉低木。葉は対生。散策路の脇にみられ、野鳥が好む紫色の実をつける。鮮やかな実の色を紫式部に重ねて名づけられた。●10~11月



ナナカマド バラ科の落葉高木。冷涼な山地によく見られ、東山では比較的めずらしい樹木。秋に色づく黄色い葉や、冬の赤い実が森を彩る。良質の堅炭として珍重された。★5~7月、●11~12月



オオアリドオシ アカネ科の常緑低木。春には漏斗(ろうと)型の白い花を咲かせ、秋には赤い実がよく目だつ。葉の付け根のトゲがアリを刺し通すほど鋭いことから名づけられた。★4~5月、●11~1月



カクレミノ ウコギ科の常緑高木。春~夏に新しい葉が出ると古い葉は黄葉する。葉の形が天狗の蓑(みの)に似ることから名づけられた。葉の形には変化が多い。



コジイ(ツブライジ) ブナ科の常緑高木。東山に多く、山を覆うように繁茂する(優占種)。5月頃に一斉開花すると、あたりに匂いが漂う。実は渋みが少なくて食べやすい。



タラヨク モチノキ科の常緑高木。雌雄異株で、雌株には秋に赤い実が集まって実る。大きな葉の裏面を傷つけると痕跡が黒く残るので「はがきの木」といわれる。



タカノツメ ウコギ科の落葉高木。尖った冬芽は鷹の爪を思わせる。若芽は食用に。3枚の小葉の複葉。5~6月に開花し、木に黒紫の実がなる。黄葉も美しい。●11~12月



コシアブラ ウコギ科の落葉高木。若芽は食用になる。5枚の小葉の複葉。8~9月に開花し、晩秋に黒紫の実がなる。薄い色に黄葉する。材は柔らかく加工しやすい。●11月~12月



イゼンリョウ サクラソウ科の常緑低木。雌雄異株。4~6月に黄白色の花を複数ずつつけ、雌株には白い球形の実がなる。シカは嫌って食べない。



アオキ 3~5月に開花するが目だたない。雌雄異株。12月頃、雌株には実が赤く熟す。葉は苦味健胃作用があり、民間薬に利用されている。シカが好んで食べる。



フユイチゴ バラ科の常緑のつる性低木。実は食べられる。キイチゴの仲間ではめずらしく、8~9月に開花し、冬に赤い実が熟すことからこの名がついた。●11月~1月